

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	谷仲 厚治
論文担当者	主査 新村 健
	副査 吉村 紳一
	副査 坂口 太一
学位論文名	The impact of peripheral artery disease on left ventricular diastolic function (末梢動脈疾患が左室拡張能に与える影響)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>末梢性動脈疾患(Peripheral artery disease: PAD)は足の血管のみならず、冠動脈や脳血管にも病変を有することが多い重篤な疾患である。さらに PAD は、心不全を合併しやすいとされ、左室収縮障害を主体とする心不全(HFrEF)だけでなく、左室拡張障害を主体とする心不全(HFpEF)とも関連があると報告されている。そこで本研究では PAD が左室拡張能に与える影響を明らかにすることを目的とし、PAD 症例と非 PAD 症例とで心臓超音波検査で計測した左室拡張機能指標を比較した。</p> <p>本研究は単施設後ろ向き研究である。2013 年 1 月から 2015 年 5 月の間に兵庫医科大学病院で経胸壁心臓超音波検査を施行した症例から、左室駆出率 50%未満、拡張能の評価が欠損、中等度以上の弁膜疾患のいずれかに該当する症例を除外し、心臓超音波検査の前後 3 カ月以内に足関節上腕血圧比(ABI)を測定した 1,121 例を対象とした。ABI が 0.9 以下または下肢動脈の血行再建術の既往がある症例を PAD 群とし、左室拡張能はアメリカ心エコー図学会ガイドラインに沿って評価した。</p> <p>PAD 群(200 例)では非 PAD 群(921 例)と比べ、E/e'(15.3±7.4 vs. 11.8±5.5, P<0.01)、三尖弁逆流血流速度(2.37±0.33 vs. 2.19±0.28 m/s, P<0.01)、左房容量係数(40.6±20.2 vs. 32.1±13.6 mL/m², P<0.01)が有意に低値だった。左室拡張障害合併率も PAD 群で有意に高かった(31 vs. 12%, P<0.01)。左室拡張障害のリスク因子を多変量解析(ロジスティック回帰分析)で評価したところ、PAD は左室拡張障害の独立したリスク因子であった(adjusted odds ratio: 1.77, 95%CI: 1.13-2.65, P=0.01)。</p> <p>本研究から、PAD は左室拡張障害を合併しやすく、左室拡張障害の独立したリスク因子であることが明らかにされた。PAD 管理において重要な知見を見出したことから、本研究は学位に値するものと評価した。</p>	